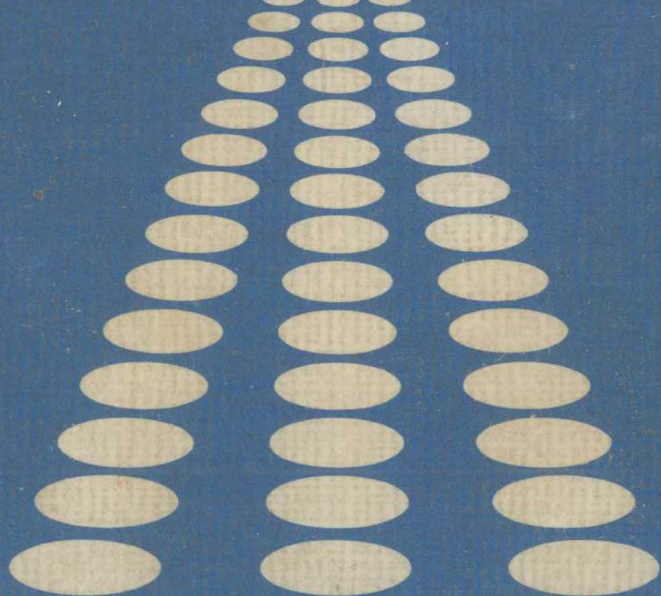




# アメリカの壁



小松左京

# アメリカの壁

昭和五十三年六月一日  
昭和五十三年八月二五日

第一刷  
第二刷

定価九八〇円

著者 小松左京

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

T102 東京都千代田区紀尾井町三

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

©Sakyo Komatsu 1978

Printed in Japan

目次

アメリカの壁 5

眠りと旅と夢 61

鳩啼時計 121

幽霊屋敷 147

おれの死体を探せ 203

ハイネックの女 253

装帧  
安彦勝博

# アメリカの壁



# アメリカの壁

## 1

ひどく胸苦しい夢にうなされて眼がさめた。——全身が、びっしょりと汗にまみれている。

カーテンはもう赤みを帯びて、日がいっぱいに当たっている事をしめしている。——カーテンをあけなくても、今日もまた猛烈に暑くなりそうな事がわかった。

バスルームに行き、昨夜の乱酔のなごりの甘ったるい臭いのする排泄をすませ、洗面台にかがんで冷たい水を後頭部にかぶり、さらにコップに一杯のみほしながら、彼は、さっき見た夢の事を考えた。——妙な夢だ。まっ黒な、猛烈に濃密な雲のようなものにとりまかれ、その雲が、だんだん凝縮して、暗黒の団体のようになって、四方から彼を押しつぶそうとするようにせまってくる。彼の四肢は、そのねばねばの流動体にとらえられ、胸や胴は、そのゴムのような、弾性があるくせに情容赦ない圧力で押しよせてくる暗黒の「壁」におされて、息苦しくなってきた。

——助けてくれ！ つぶされる！

とわめきながら、彼はその「縮み行く漆黒のゴムの空間」から、何とかぬけ出そうともがき、頭の上にあるわずかな隙間を押しひろげようと格闘した。

と——突然、ぱっとはじけるように頭上の黒い分厚いものに穴があいた。あいたとたんに、その「ゴムの雲」は、ちりぢりになって四方にちらばってしまい、彼は突然、濃い灰色の霧の中に、何のささえもなく浮いているのだった。

足の下にも、何もささえるものは無かった。——彼は、その灰色の、見通しの悪い上も下もわからない空間を、ゆっくりと回転しながらただよっているのだった。重力は感じられなかったが、自分がぐるぐるまわっている、という事は、頭頂部と爪先に、かすかに遠心力を感じる事によってわかった。まわりながら、ただよっているらしいのだが、どこへむかってただよっているのかわからなかった。彼は、まわりの空間の、あまりの漠々とした広さ、とりとめなさに、突然はげしい、心臓の凍りつくような恐怖を感じ、思わずわめいた。——そして眼がさめた。

うっ……と、胃がうずき上げる。歯磨で口のまわりをまっ白にしながら、彼は鏡の中をのぞきこんだ。——白眼が赤茶色く濁り、下瞼に黒ずんだたるみができている。顔色は鉛色で、不精鬚が汚らしくのびている。

畜生め——と、苦酸<sup>にがす</sup>っぱい唾をはきながら、彼は呪った。——何が、バーボンはアメリカの誇りだ。もう二度と飲むものか！ 痛飲して、翌日、胃にこたえなかったためしがない。

口をすすいで、鬚をそりにかかろうとして、ふと彼は気がついて時計を見た。——七時四十分だ。あけはなしのドアから、ベッドの方をのぞいてみる。電話は沈黙したままだ。彼は大仰に舌打ちして、鬚をあともわしにして電話をとりあげ、ダイヤル9をまわした。呼出し音はきこえるが、なかなか出てこない。

「オペレーター……」

と、大分たってから、女性交換手の不機嫌そうな声がきこえた。——アメリカも十年前にくらべれ

ばずいぶん無愛想になったものだ。このごろ、どんなりっぱなホテルにとまっても、昔のように、「グッモーニング・サー、メイ・アイ・ヘルプ・ユー？」と言った、ヤンキーガールの微笑の見えるような明るい声はきかれなくなった。

「一二六四号の豊田だが……」と、彼は言った。「今朝、七時半に、東京にバースン・トウ・バースンでつないでもらうように昨夜たのんでおいたんだが……」

「トウキョウ？ 日本のかい？」

「そう……」

とぶっきらぼうに豊田は言った。——何を考えてやがるんだ。ニューヨークにや四万人からの日本人がいて、やたら日本へ電話を入れているのに……。

「東京——何番ですか？」

「メモはないのかい？」

「もう一度どうぞ……」

豊田は、東京の自宅の電話番号と、妻の名を言った。——ニューヨーク午前七時半、東京午後九時半——午後十時をすぎると、妻の葉子は眠りこんでしまう可能性がある。

「お待ちください」

と交換手は言った。——受話器のそこで、がりがりぶつぶつという音がきこえ、うんと遠くの方で、何かかん高い声でべちゃくちゃべつてゐる女の声が混信する。相手は応えているらしいのだが、その声はきこえない。

「へロー……」と交換手の声が言った。「東京は出ません」

「呼んでいるの？」

「ノー……」交換手は何だかためらうように言った。「国際電話は、今ブラックアウトです……」

「ブラックアウト？」彼は眉をひそめた。「ストライキかい？」

「そうじゃありません。でも——交換手が出ないんです」

「回復の見こみは？」

「私にはわかりませんが……」

「オーケイ、それじゃ……」彼はあきらめてもう一度時計を見た。「九時にもう一度トライしてみてくれ。——部屋にしなければ、ロビイにいる……」

「わかりました……。よい休日グッド・ナイス・ホリデーを……」

最後にはじめて交換手はお世辞らしい言葉を言った。

それにしても——と、鬚をそりながら彼は、ぼやけた頭で考えた。——国際電話がブラックアウト

とはどういうわけだろう？ 海底電線ケイブルでも切れたのだろうか？

それにしてもおかしい。太平洋横断の海底電線は、大陸横断の連絡幹線がカナダのヴァンクーバーまで走っていて、そこからハワイ、ミッドウェー、ウェーク、グアムと来て、二宮に上る。もしハワイとグアム間の深海底のどこかで故障がおこっても、ニュージーランドのオークランド經由の迂回路もあるし、第一、通信衛星サテライトが何回線もあるはずだ。——ストライキのニュースもきいていない……。

## 2

地下のコーヒーショップへ行って、トマトジュース、パンケーキのベーコンぞえ、コーヒーというごくあり来りの朝食をかきこみ、ロビイに上ってくると、もう到着客、出発客で、かなりたてこみはじめていた。

ブックスタンドで、新聞を買って、窓際の椅子にすわる。——アメリカ大通りと、五十三番通りの角にあるニューヨーク・ヒルトン付近の街路は、早くも軽装の男女であふれはじめてゐる。土曜日なのだが、午前中だけでも働くのは日本人ぐらゐなもの、通行人はすべてヴァカンスムードだった。学校は夏休みだし、月曜日は独立記念日だ。——ビッグ・ウィークエンドというわけである。

外国の都市はどこでもそうだが、ニューヨークの雑踏はいつまで見ても飽きない。最近は多少おちついて来たものの、いまだに世界一危険な街と宣伝されてはいるが、それでもありとあらゆる人種、職業、年齢の人々が、それぞれの屈託や欲望を抱いて、めいめい勝手に生きているように見える。

——窓際にすわって見ていると、新聞を読むのも忘れてしまふそうだ。

新聞そのものは、大したニュースはのっていない。ここ半年ばかりの傾向だが、アメリカの新聞もテレビも、どういうわけか、国際面が、精彩を欠いて来ている。アメリカ全体として、国外問題に、急速に関心を失いはじめているようだ。——ヴェトナムからずいぶんたつのに、その傾向はまだつづいているみたいに見える。建国以来、アメリカの味わったはじめの「挫折」なのかも知れないが、それにしても長い。アメリカは、たしかにあれ以来、妙にいじけている。国内に「和解」を達成するだけでも、あれだけ屈辱的な手術を必要としたのは、でかい国だから無理はないが、それ以後、「可能性」や「希望」の国というあの大らかさは失われっぱなしで、まだ回復していないようだ。新聞の海外面のスペースは変らないが、一つ一つの記事のあつかいは、変に白けて、かつてニューヨーク・タイムズやタイムの持っていた、いきのよさ、熱っぽさはまったく見られない。

かわりに、国内問題や米州問題には、不自然な大仰さがあらわれている。——その新聞も、一面は、二日後の独立記念日におこなわれる、大統領の特別演説の準備についていやに大げさな記事がのり、もう一つの大きなニュースは、カリブ海の浅海底に発見された、石の巨大遺構が、いよいよ先史時代

の、「フエニキア系大帝国」の首都のものだ、と判明した、という記事だった。

この所、アメリカはこの手の話題で持ちきりだった。——紀元前九世紀、中米の最初のインディオ文明が成立して間もないころに、ヨーロッパのケルト人が東部海岸に広範に入植し、カルタゴが、このケルト人たちと毛皮貿易をやっていた、という事は、一九七六年以来、定説となっていた。カルタゴのハンノが東部海岸に「領土」を持っていた、と言うのだ。最近では、その時代よりもっと古い遺跡、遺物らしいものが次々に発掘されはじめた。「ルーツ」さわぎではないが、アメリカ古代史が今大きく書きかえられようとしており、テレビもラジオも、映画も、出版も、まるで浮かされたようにその話題を飽きずあおりたてている。ちょっと日本の「耶馬台国さわぎ」を思わせるが、何しろあの派手好きで巨大なアメリカだから、その何十倍もダイナミックにあおっている。だが、他国の人間から見ると、そのさわぎは、なんとなくしらじらしい。

大した記事もないので、新聞をばらばらとめくってテーブルの上へおくと、部屋へかえろうと立ち上った。

ちょうどその時、チャーターバスがホテルの前について、中から大勢の日本人観光客がおりて来た。ほとんど初老の男女ばかりで、暑さにうだって、ぐったりした顔つきをしている。——東京からついたばかりで、へたばっているんだな、と思いつながら、彼はその一行とからみあうようにしてエレベーターの方へ進んだ。何となく一行の様子が変だ、とは感じていたが、その一行の中に、ふと顔見知りの三十ぐらいの女性の姿を見つけた時さすがに意外の感にうたれた。

「どうしたんです？」と彼は、その横田明子という女性の肩をたたいてきいた。「今朝、早かったんじゃないんですか？」

「ああ……」と、横田女史はふりむいて、ちょっとづつが悪そうに笑った。「朝五時にたたき起され

て、空港へ行ったのよ。それが——舞いもどりの」

「へえ——どうして？」

「何だかよくわからないけど、東京行きの飛行機が出ないの。——いつ出発するかわからないんですって」

「やれやれ……」と彼は肩をすくめた。「エンジントラブルか何かですか？」

「何だかよくわからないの。——一時間ほど待って、コンダクターがとにかく一たんホテルにおもどりください、と言うんで……」

「ハリケーンでも来てるのかな？」

「そうかも知れないわ。——ほかの便もとばないみたいで、ケネディ空港のチェックインは、何だかごったがえしてたわ」

「じゃ、全便欠航？」

「全便かどうかは知らないけど……」横田女史はコンバクトを出して鼻柱をたたいた。「ひどい顔……。あなた、昨夜あんなに飲んで、何ともなかった？」

「宿酔いですよ。——ひでえ夢を見ちゃった」エレベーターのあいだドアの中にふみ入りながら彼は苦笑した。「バーボンなんぞ、二度と酔がってがぶ飲みしない事にしましたよ。あまり、日本人の胃にゃあわないみたいだ……」

## 3

部屋へかえると、九時二分前だった。——まだ掃除のすんでいない部屋で、彼は煙草を吸いながら、ぼんやりベッドの上にひっくりかえっていた。「煙草発ガン説」以来、めっきり味のおちたアメリカ

煙草を一本吸い終り、時計を見ると、九時を五分まわっていた。

相かわらずルーズな交換手にむかつ腹をたてながら、彼は電話をとりあげた。

ダイヤルをまわそうとして、ふと彼は気がついた。——そうだ、<sup>コレクト・コール</sup>料金先方払いや、<sup>バース・トゥ・バース</sup>個人通話でなければ、何も国際電話の交換手を通さなくても、東京はダイヤル直通でかけられるはずだ。ホテルの部屋からでも……。

・そう思つて、サイドテーブルの上のディレクトリイをひっくりかえすと、果して国際電話ダイヤル・インのかけ方と、かかる地域がのつていた。「日本」のエリア・コードは……〇〇八だ。

彼は、指示通りにダイヤルをまわしてみた。——かちかち、と、コネクターのつながって行く音はしたが、しかし、いつまで待っても、呼び出し音はならない。一たん切つて、もう一度慎重にやりなおしてみる。——だめだ。

あきらめて彼は、交換台を呼んだ。

「ああ……」と、今朝と同じらしい交換手が、部屋番号と名前をきいて、早口で言った。「忘れたわけじゃないんですが、まだブラックアウトがつづいているんです……」

「回復の見こみは？」

「わかりません……」

「原因も？」

「国際電話のオペレーターも知らないようなんです……」

「じゃ、しかたない——」彼は肩をおとして、「回復するまで待つとしよう。——ロンドンを呼んでほしいんだが……」

「申し上げたでしょう。——<sup>インターポール</sup>海外電話は、全部……」

「なんだって？」彼はあらためてぎょつとした。「ヨーロッパも不通かい？　ハワイは？」

「だめです」と交換手は、にべもなく言った。「さっき、一度だけメキシコ・シティがつながりましたが、今はだめです……」

「そりゃ大変じゃないか！——海外通話が、全部ブラックアウトとは……。テレビのニュースでウォルター・クロンカイトが何か言ってるかい？」

「知りません。日本じゃ、交換手が勤務中にテレビみるんですか？」

「テレビどころかスキヤキを食わせてるよ。日本も所得が上ったんでね——。あなたの名は？」

「アニタ……」

「じゃ、アニタ——また呼ぶから、何かわかったら教えてくれたまえ」

くすつ、と笑う声がして、電話は切れた。——彼はしばらく受話器の穴を見つめ、それから首をひねりながら電話をもどした。

カーテンをあけ、窓をあげると、排気ガスのにおいのまじった熱気が、部屋にはいつて来た。——同時に、五十三番通りの喧騒も上ってくる。窓のむかいが、J・C・ベニイ・ビル、斜め向いがCBSのビルだ。彼は二本目の煙草を吸いつけて、口を歪め、頭をがりとかいた。

五番街の方から、プラスチックバンドの演奏らしいものがかすかに聞えてくる。明後日の独立記念日をひかえて、何かバレードが行われているのだろう。——見おろすと黄色いタクシーが走り、乗用車が走り、人出はいよいよ多くなってくる。

——のん気なものだな……。

彼はそれらの家族を見おろしながら思った。

——国際電話が、ほとんど全部、ブラックアウトだと言うのに、みんな全然気にしていないみたい